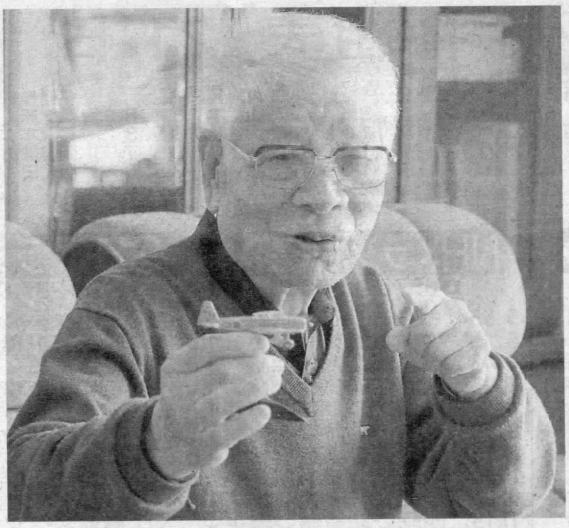
「僕らは消耗品だった」

終戦前日に特攻命令

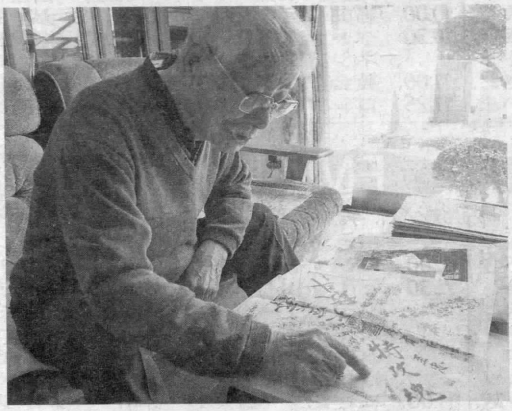
死を覚悟した元機上通信兵



九九式襲撃機の模型を手に自身の経験を語る元機上通信兵の各務義彦さん＝愛知県東海市

太平洋戦争の終戦前日、陸軍機上通信兵だった各務（かがみ）義彦さん(98)＝愛知県東海市＝が、上官から告げられた出撃命令は、事実上の「特攻」だった。数時間後に出撃は中止となり、日本は敗戦した。「僕らは消耗品だった」。各務さんは翻弄（ほんろう）された人生を振り返り、二度と戦争を起こしてはならないとの思いを語った。

農家の九男として岐阜県で生まれた各務さんは、16歳で陸軍航空通信学校に入校し、各地を転々としながら訓練を積んだ。約1年半がたった1945年春、福岡県にあった軍司令部で飛行第66戦隊への配属を告げられた。鹿児島県の知覧飛行場へ行くよう命じられたが、同期8人で到着すると、同戦隊の拠点は同県内の万世飛行場と判明。司令部の混乱ぶりを目の当たりにし、日本軍の戦況悪化を悟った。



戦友からの寄せ書きのコピーを見ながら自身の経験を語る元機上通信兵の各務義彦さん＝愛知県東海市

第66戦隊は、沖縄・嘉手納湾沖の米艦隊への攻撃と特攻機の誘導が主な任務。機上通信兵は2人乗りの九九式襲撃機の後部座席に乗って出撃するが、戻った兵士から聞こえてくるのは、敵艦からの猛烈な射撃で空は火柱のようだったという、力の差を示す話ばかりだった。

同期とは、戻れずに敵艦に突っ込む時に無線機で送る別れの合図を決めたこともあった。ただ出撃した同

飛行第66戦隊に着任した当時18歳の機上通信兵、各務義彦さん＝1945年、鹿児島県（本人提供）